

入鹿暴水碑

(表) 暴水流亡各霊墓、側面には慶応四戊辰歳五月一四日、施主柴山藤藏とされるされている。

中小口地内五条川に架かる六部橋の西側に建立されている碑がこれで、碑面には、

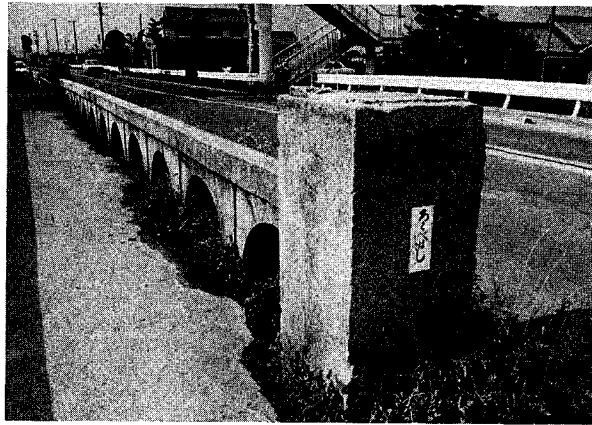


図4-37 五条川にかかる「六部橋」(中小口地内)

第三項 その 他

六部橋

中小口地内を流れる五条川に架けられている立派な六部橋には、つぎのような話が伝えられている。

むかし各地域を巡歴し修行を重ねていた六部が、この地に来てついに土着し、住人の難儀を思い架けたのがこの橋である。(六部)は鎌倉時代後期より江戸時代に入ってからであった。

また一説には、六部がこの橋の所に来て行き倒れたとも伝わっている。いずれにしろこの橋の名は六部にちなんでいつの時代にか付けられたもので、橋の西側には六部の碑がたっている。

碑面には、

(表) 奉納大乘妙典六部国供養、宝暦一一年申巳年青春

(裏) 尾州丹羽郡中小口村、領主導善、

と刻まれている。

(注) 宝暦一一年—西暦一七六一



(注) 入鹿切れの様子は別項、自然災害にしるす。

図4-38 入鹿切れ暴水流亡の碑(中小口地内)

梶原宗安の塔

大口村誌によれば、この塔はむかし松山と外坪本郷の中程、南野の地に梶原松が生えていた。これを切りその跡へ、梶原宗安の塔を建てたとされているが、現在巾上地内(大字外坪一七八五番地)にある墓地に建てられているのがそれであろう。

この塔には「惟時寛保二歳……」とされるされており、



図4-39 梶原宗安之塔(外坪巾地内墓地)

台石には、この未曾有の大水により被害をうけた、羽黒村、桑田村、橋瓜、五郎丸、下野、余野、小口、河北外坪、伝右工門新田、宗雲新田などの村名が刻まれ、入鹿池堤防決潰による被害が広い地域におよんだことを示している。

また入鹿暴水の碑は大字河北こまはたの妙智寺境内にも建立されており、これは当時大地主であった仙田半耕が惨状をしのび明治初年建立した。

この時の建立と考えられるが、いつからどうしてここにあるか詳細がまったく不明である。(ただ梶原の姓からみれば今からおよそ五、六百年前、梶原源太景季の子孫が羽黒へ来たこと、そして村誌にもしるされているように、服部の家紋が梶原の紋と同じであり、この地に何等かの関係があったと思われる。)

(注) 寛保二年―西暦一七四二年

金助と
その母の碑

昭和四一年一〇月堀尾氏邸宅跡(八剣社境内)に建立されたこの碑には、天正一八年(一五九〇)小田原の合戦に豊臣秀吉の軍

にしたがって参加し、武運拙なく若い身でこの世を去った堀尾金助とその母の物語りが碑文に刻まれている。

金助の母は、金助の死後その三十三回忌に東海道熱田(現名古屋市熱田区内)の精進川にかかる裁断橋を修架し、供養を営むとともに橋の擬宝珠に子を思う母の思いを刻んだ。

銘文は、日本女性三大銘文の一つにかぞえられ、世に広く知られている。

ここ御供所は「金助とその母」の居住地といわれ、この遺徳を讃えるとともに、郷土の誇りとしてこの碑が立派に建立された。

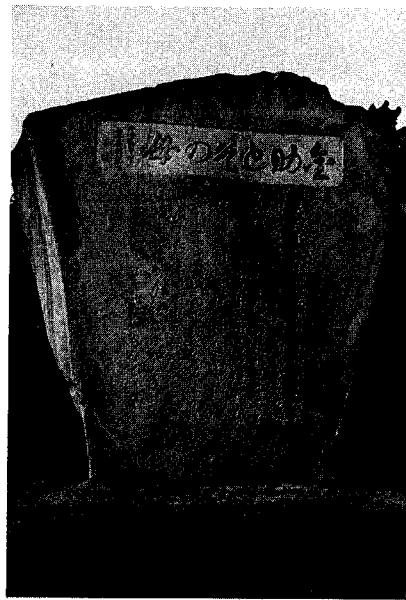


図4-40 金助とその母の碑

江戸時代の
道標

往昔より道標は数多く町内で見受けられたが、交通機関が発達した今日このような道標はあまり残っていないが。この自然石を利用した道標は、昔、小口^{おぐち}地内を通る織田街道に小口村中組(現中小口)の住人近藤甚吉なる人が慶応三年(一八六七)に現在地より南西約二〇〇メートルの地に、旅人の道案内として建てたものである。

○現在地

大口町地内 県道斉藤羽黒線沿い兼房刃物工場東南角。

荒井の樋門
往昔、用水路の開削にともない木津用水幹線に多くの樋門が設置されたなかで、近代的な堅固な樋門の一つである。

灌漑期間中に、新木津用水路へ毎秒最大八トン。

合瀬川用水路へ六トン、五条川用水路へ三・五トンをそれぞれ分水する基点である。

木津用水幹線水路は、慶安元年(一六四八)に起工し、同三年に完工し、樋門は何度も改良が加えられ今日の立派なものになっている。

第四項 名 所

町内にはとくに観光施設、名所はないが近年、五条川堤の桜、尾北自然遊歩道が町民憩いの場として、大いに親しまれるようになっていいる。